

羊飼いたちは夜通し羊が襲われないように、またどこかへ行ってしまわないように寝ずの番をします。彼らは自分たちの羊一匹いっぴきの命の価値を知っていますから、自分の命に替えてでも守り通そうとする人たちなのです。

占星術の学者たちは、「東の方からエルサレムに来て」とあるように外国から来た学者でした(ルカ 2 章 1 節を参照)。他の国からやってくるということは、普通なら考えられません。彼らは自分たちが真理を探究するうちに、ユダヤの国まで導かれ、一つの命の誕生に立ち会うという体験をするに至りました。その一つの命の誕生を目撃し、求めていた真理がそこにあることを知った彼らは、帰り道、ユダヤの国を統治していたヘロデ王のもとに立ち寄り、自分たちの国へ帰っていきます。ヘロデ王は命の誕生を喜ぶ者ではなく、命を奪う者(マタイ 2 章 13 節を参照)だったので、占星術の学者たちの目撃した真理、つまり命と向き合うことはできませんでした。彼は占星術の学者たちに対し、この命を捜し当てたら自分にも報告して欲しいと伝えていたのにも関わらず、報告を受けることがなかったために激怒し、ベツレヘム周辺にいた 2 歳以下の男の子たちを虐殺します(マタイ 2 章 16 節を参照)。権力に溺れ、すべてが自分の手中にあるという誤りが引き起こす結果はいつの時代も目を覆いたくなるほどのものです。そのような誤りに陥った人生を続ける限り、その人が命の価値に気付くことはないということをクリスマスは教えているのです。喜び祝う日に、今も世界中のどこかではこのような悲劇が繰り返されていることを忘れてはいけません。

クリスマスとは表というよりも、今日を生きるために懸命に過ごしている人や、大きな苦難を抱えながらも希望をもって生きている人や、自分のことよりも周囲の人の幸せのために目立たないところで奔走している人などの、いわば裏のいる人を照らすための出来事と言えます。馬小屋で生まれたイエスだからこそ、その目にはこの人たちの姿が鮮明に映り込んでいるのです。

クリスマスは年末の多忙な時期に祝われます。多忙だからこそ、大切な人と盛大に楽しんで過ごそうと、飾りつけやプレゼント、また、ご馳走を準備してのパーティーなどにも力を入れます。さらに商業施設間での商戦も激化します(コロナ禍では難しさもありますが)。普段、味わえない楽しさや嬉しさがあるので、私もそのような雰囲気は好きです。でも、少しの時間だけでも高揚する気持ちを落ち着かせ、クリスマスという出来事自体の持つ意味を深めようとするとき、平和ってどんな状態なのか?とか、命って何のためにあるの?などをもっと考えようとする心の動きが生じてきます。共に命を囲みながら喜び、自分に与えられた命、また自分から生まれてくる命にも目を向け、世界中の一人ひとりがそれを喜び合う日、これこそがクリスマスなのです。今年のクリスマス、忙しさや騒がしさから一歩身を引いて命を発見し、喜びとともに分かち合う日にしませんか?

2021 年 12 月 24 日(金)

水巻カトリック教会 主任司祭
谷口尚志